



# 風歌 3



森下淳一

## 影法師

影法師

動けばいっしょに動く

光がなくなれば

消えてしまう

## 「ぬ」の孤独

なんで君は

キーボードの左上で

孤独なの

絵の具を「ぬ」るに

雨に「ぬ」れるに

着物を「ぬ」ぐに

風が吹き「ぬ」ける

ぬらす、ぬりつぶす

ぬるとき、ぬれば、ぬろう

「ぬ」の孤独は

「ぬ」る人の孤独

## やっぱり

やっぱりあなたが好きだから

やっぱりあなたに逢いたくて

やっぱりあなたを抱きたいのです

それが許されないことだと判っていても

やっぱりあなたが好きだから

あなたを抱きたいのです

## 蝉の涙

ひまわりはうなだれ  
コスモスは秋風を誘う  
地上に出るのが遅すぎた  
蝉が一匹  
朝の愁いの中で  
鳴いている  
「つくつくほーし、つくつくほーし」  
鳴けど叫べど  
仲間は誰もいやしない  
地下には帰れず  
秋風とは遊べない  
「つくつくほーし・・・ほーし・・・ほーし・・・」  
命短し秋の蝉  
恋もできずに  
泣くばかり

## 鳥になれず

気持ちよく空を飛んでいたのに  
いつのまにか恋の雲に迷いこみ  
羽はしっとり濡れて重くなり  
君の声を聞かないうちに  
僕は海に落ちてゆく  
でも  
海の方が恋より優しいから  
僕は気持ちよく  
朽ちられるだろう

僕らは

生きている僕らは  
自由に空が飛べない  
自由に海を泳げない  
心を持つ動物は  
飛ぶ夢を持ちながら  
やがて暗い闇に落ちてゆく  
愛の化石を胸に抱いて

振り向けば

そんなにあくせくしなさんな  
何が欲しいの  
お金なの  
名誉なの  
心や  
愛や  
友情をなくしたら  
気がついた時には  
そんなに簡単に見つからないよ  
酒で夢を見ても無駄さ  
知らず知らず  
空虚な沼にはまっていくだけ  
振り向いてごらん  
孤独だって  
君には見向きもしない

どうして

どうして

枯れ葉が風に散るように

心に枯れ葉の風が吹く

どうして

花を散らす風が吹くように

心の花に風が吹く

どうして

海に潮風が吹くように

心に海の風が吹く

どうして

冷たい雨が道を濡らすように

心に雨がしみて降る

どうして・・・

心に

雪が降る

雨が降る

風が吹く

僕は・・・

陽を求めて

酒を飲む

## 胸の中の青

胸の中の悲しみは  
空より遥かにあおい青  
海より深いあおい青

## 春よ・こい

この寒い季節が過ぎたら  
春風が吹いて  
優しい君が扉を開けてくれるだろう  
美しい音楽が流れ  
薫る花が咲き  
暖かい光の中で  
君に酔い狂い  
翼を持って  
空を飛ぶ夢を見れるだろう  
春よ・こい  
恋の甘美の  
春よ・こい

## 僕の血

たとえ僕が都会の隅で歌を歌おうと  
僕の血は大地を生きてきた血  
たとえ僕が都会の愁いを詩に詠おうと  
僕の血は大地を生きてきた血  
たとえ僕が都会をさまよひ生きようと  
僕の血は大地を生きてきた血  
たとえ僕が都会の風に涙を流そうと  
僕の血は大地を生きてきた血  
たとえ僕が都会の土に骨を埋めようと  
僕の血は大地を生きてきた血

## 生

ギターがあれば  
歌える  
鉛筆とスケッチブックがあれば  
描ける  
ペンと紙があれば  
詩が書ける  
心があれば  
君を思える  
ただそれだけのこと  
そんなにむずかしいことじゃない

落ちる

落ちる

落ちる

落ちてゆく

君の胸に

君の心に

君の湖に

君の海に

君の体の中に

君の優しさに

落ちて

落ちて

埋もれる

## 帰郷

昨日

ふるさとに帰りて候

山桜

咲きほころびて候

ふるさとは静かなりて

おだやかな陽の光

もの悲しくて候

学び舎跡の

草木

おいしげりてそうらはば

うぐいすの鳴く声

心に深く

しみいりて候

時の流れのはかなさ

感じいりてござ候

昔日の日々

走馬灯のごとく

浮かびきて候

帰京のおり

あなた様にお会いしたく

文したためてござ候

桜餅など

持参いたしたく候

## 老いと友に

今日はお腹の調子が悪い  
今日は頭が痛い  
今日は右腕がしびれる  
今日は膝が痛む  
今日はいつもより目がかすむ  
今日は、、、  
まったく  
いつのまにか  
老いが友だち面して寄ってくる  
今日は  
腰をちくちくつついている

## 花の味付け

ジャスミンをふりかけ  
くちなしを少々  
金木犀をたっぷりまぶし  
かくし味には  
梅と水仙  
フリーズアをそえて  
沈丁花で飾りましょう

心

心

風が吹いたり

雨が降ったり

重い石を背負ったり

穴があいて

空しい青空がのぞいたり

心

いったい

僕の胸のどこに住んでいるの

瞳から恋を入れると

晴れのち雨(雪)

雨(雪)のち晴れ

心

僕の体に住みついている

天使の悪魔

僕がいなくなれば消えてしまう

僕の創る作品は

僕の心の

小さな足跡だろう

## 繋がる世界

別れてもう会えない人たち  
忘れた人もいるし  
思い出す人もいる  
死後の世界があるのなら  
その世界で再会できるのなら  
死はさみしくはない  
死後に別れた人と再会できる  
その世界を信じる思い  
それは  
生きている僕らにとって  
必要なことかもしれない

## 羊水

羊水(海)の中から生まれ  
人、人、人の中に生きている  
人、人、人の中に生きて  
また 羊水(海)の中に戻っていく

輝く瞳  
歌う唇  
恋する心

けっして止まらない時に  
永遠の命などないのは分かっている

永遠に輝き  
永遠に歌い  
永遠に恋することを願う

星や風  
空や海を感じながら

恋と愛の色に染まったまま  
羊水(海)に戻りたい



## 愛の水筒

人は愛する心を持っているから  
死んで無になるわけがない  
夕焼けや潮風に涙する人が  
死んで無になるわけがない  
現世(うつしよ)は  
次の世界への通り道  
水筒に愛を入れて  
歩いていきたい

## ほろ酔って

ほろ酔いに梅の花の香りがあればいい  
ほろ酔いにフリーズアの花があればいい  
ほろ酔いに沈丁花の香りにひたればいい  
ほろ酔いに金木犀の花が匂えばいい  
ほろ酔いに花に酔って人生終わればいい

人間に生まれて

羽もなければ  
エラもない  
キバもなければ  
しっぽもない

人間に生まれて

愛を知り  
喜びを知り  
寂しさを知り  
苦しさを  
空しさを知り  
別れを知り  
悲しさを知り

人間に生まれて

空に羽ばたけず  
海と遊べず  
誰も知らない  
明日への道を  
歩いてる

## 風 大好き

風は

花の香りを運んでくれる

君の香りを運んでくれる

思い出を運んでくれる

夢を運んでくれる

希望を運んでくれる

みんなに吹いてくれる

ときどき海の味がする

だから

風が大好き

## 影

気がつくと影が後をついてくる

気がつくと影が前を歩いていく

光がなくならないかぎり

僕がなくならないかぎり

影はいつまでも

ついてくる

## 時

時の中に生きている  
時の中に朽ちていく  
時の中に消えていく  
時を感じなかった君への愛も  
宇宙の時に消えていく

## 高円寺坂

金木犀の恋を思い出す  
この坂道下る時  
沈丁花の別れを思い出す  
この坂道上る時  
高円寺坂の色あせた風  
青春の形見がちらばっている  
水仙のさみしい香りをのせて

## 光と影

喜びと悲しみ  
愛と嫉妬  
生と生の終わり  
永遠への錯覚  
繁殖と腐敗  
健康と病  
時間の持続と空虚  
芸術のせつなさ  
よそよそし孤独  
瞳の海の無垢な涙  
いつか朽ちていく  
光と影

## 海よ

モノクロの風景なんて  
おれはいったい何をやっているのだろう  
孤独さえ寄りつかない  
さびた恋の風  
空に上ることも  
地に埋もれることもないのか  
海よ 海  
沈むのは怖いから  
ただその海面に眠らせてほしい  
おだやかに静かに  
その大海原に眠らせてほしい  
地上に生きるのに  
疲れてしまったから

遠くへ

何もかも捨て  
遠くへ行きたい  
心に思い出はついてくるけど  
山の風の暖かさと冷たさ  
海の風の優しさと空しさ  
人生という重い荷物  
けっして下ろせない荷物  
恋が醒めた時  
酒が醒めた時  
僕の体は枯れ葉のように軽くなる  
何もかも捨てて  
遠くへ行きたい  
枯れ葉が土に朽ちる前に

北風

北風が吹いている  
もうすぐ春がくるよー  
春がくるよーって  
北風が吹いている  
もうすぐ花が咲くよー  
花が咲くよーって  
北風が吹いている  
過ぎていった春の思い出をのせて  
北風が吹いている  
過ぎていった君の笑顔をのせて  
北風が吹いている  
僕の心を遠い過去に誘うように

君はどこへ？

おーい

おーい

おーい

君はどこへ？

おーい

おーい

おーい

君はどこへ？

おーい

おーい

おーい

おーい

## 風歌 3

<http://p.booklog.jp/book/22928>

著者 : 森下淳一

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bluebarubora/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22928>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22928>